辻ノ内遺跡

平成 19 年 6 月

宇都宮市教育委員会

序

本遺跡の近くを流れる姿川流域には、塚山古墳群をはじめ、稲荷古墳群や下台原古墳群など数多くの古墳群が存在します。特に県指定史跡の塚山古墳群は、全長９８ｍの前方後円墳である塚山古墳を中心に３つの前方後円墳が連続して築造され、この地域の盟主的な存在の古墳群です。

この古墳群の築造時期は、畿内で言うと仁徳朝～雄略朝期で、大和朝廷を中心とした国家体制が徐々に整備されつつある時期に当たります。

今回調査された古墳も、この時期の所産であり、塚山古墳群の被葬者と何らかの関係があった人物の墓と考えられます。

このような調査成果は、本県の古代史を究明する上で極めて貴重なものであり、本報告書が多くの方々により広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力をいただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成19年6月

宇都宮市教育委員会
教育長　伊　藤　文　雄

目　次

序　目次　例言　凡例
第1章　調査に至る経緯と調査経過
　1－1　調査に至る経緯・・・1
　1－2　発掘作業の経過・・・1
　1－3　整理作業の経過・・・1
第2章　遺跡の位置と環境・・2
　2－1　地理的環境・・2
　2－2　歴史的環境・・3
第3章　調査方法と成果・・・7
　3－1　調査の方法・・7
　3－2　基本土層・・・7
　3－3　遺構・・・9
　3－4　遺物・・17
第4章　総括・・24
参考文献
写真図版
報告書抄録

挿図・表目次

第1図　辻ノ内遺跡の位置・・2
第2図　辻ノ内遺跡周辺の地形・・・3
第3図　辻ノ内遺跡と周辺の遺跡・・4
第4図　基本土層・・・7
第5図　調査区全体図・・8
第6図　1号墳平面図・・10
第7図　1号墳周溝断面図・・・11
第8図　南東遺物集中区・・12
第9図　南西遺物集中区・・13
第10図　1号周溝内土坑・・14
第11図　1～3号土坑・1号ピット・・16
第12図　出土遺物（1）・・18
第13図　出土遺物（2）・・19
第14図　出土遺物（3）・・20
第15図　出土遺物（4）・・21
第1表　辻ノ内遺跡と周辺遺跡一覧・・5
第2表　出土土器属性一覧・・・22
第3表　出土石器・石製品属性一覧・・23

図版目次

図版1　遺跡遠景・遺跡全景
図版2　1号墳周溝断面
図版3　1号墳南東・南西遺物集中区
図版4　1号墳南西遺物集中区、土坑
図版5　出土遺物
図版6　出土遺物
図版7　出土遺物

例　言

1．本書は、宇都宮市西川田町字辻ノ内 209-1 他に所在する辻ノ内遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は宗教法人大山祇命神示教会の宗教施設建設に伴い、宗教法人大山祇命神示教会より委託契約を受けた㈱東京航業研究所が実施した。
3．調査は，宇都宮市教育委員会を主体者とし、(株) 東京航業研究所が現地調査を平成 19 年 2 月 26 日～平成 19 年 3 月 17 日まで、整理·報告書作成を平成 19 年 3 月 25 日～ 5 月 31 日まで行った。
4．調査面積は 676 ㎡である。
5．本書の執筆・編集は、佐々木・小久・林・小野・市瀬・大橋が分担した。各項の文責は各文末に記載している。
6．調査組織

調査指導　今平利幸（宇都宮市教育委員会）、佐々木藤雄（東京航業研究所）
調査担当　小野麻人（東京航業研究所），小久顕治（東京航業研究所），大橋　生（東京航業研究所）
調査及び整理参加者　荒川康祐　飯野正子　市瀬俊一　入江晴江　小椋朋子　加藤　玄　川村宣央
坂本貴子　篠崎安子　関口典子　近清路子　土屋隆行　林　邦雄　古川貴弘
堀中國代　峯岸未以留　村山彩子　渡辺真吾　渡辺弘美

7．発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第である（敬称略・順不同）。

荒川妙子　荒川業介　今井千恵　斎藤弘道　関根唯充　平田博之　村山　修
宗教法人大山祇命神示教会　清水建設 株式会社（関東支店 栃木営業所）　㈱都市開発コンサルタント

凡　例

1. 本文中に掲載した実測図の縮尺は，原則として次の通りである。
全体図 1/200　1 号墳全体図 1/160　1 号墳周溝断面、土坑・ピット図 1/40
土器実測図 1/3、1/4　土器拓影図 1/3　石器・石製品 3/4、1/3、1/4
2. 遺構実測図中のレベルは海抜高、方位は座標高を示す。
3. 遺物実測図中のスクリーントーンは、須恵器・赤彩処理を示す。
4. 写真図版は原則として 1/3 とした。
5. 遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。

須恵器　赤彩処理

第１章　調査に至る経緯と調査経過

１－１　調査に至る経緯

平成18年10月、代理人都市開発コンサルタント西嶋氏より、西川田町に所在する辻ノ内遺跡（県番号3211）内での教会建設に伴い、文化財保護法93条の届出が提出された。これに対し、県より確認調査が必要との指示があったため、事業者である大山祇命神示教会と協議し、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、10月31日～11月4日にかけて実施した。調査の方法は、開発区域内の建物が建設される予定の場所に、幅２ｍの試掘溝を４本設定し、約50㎝～１ｍの深さで遺構の確認を行った。

その結果、Ｔ－１・Ｔ－４では遺構を確認することができなかったが、Ｔ－２・Ｔ－３で古墳と思われる溝を１基確認し、さらにその周溝部分からは須恵器甕の破片がまとまって出土した。その土器から、この古墳は５世紀代のものと想定された。

この調査結果を踏まえて、事業主体である大山祇命神示教会、設計担当の都市開発コンサルタント、建設担当の清水建設と協議を行い、その後の対応を検討した結果、遺構の確認された約650㎡分を本調査することとなった。

その後、調査の担当が株式会社東京航業研究所と決まり、平成19年２月13日より約１ヵ月の期間で調査を行うことになった。（今平）

１－２　発掘作業の経過

発掘調査は、宇都宮市教育委員会による試掘調査の結果を受け、平成19年２月26日から平成19年３月17日までの約３週間にわたって実施した。

先ず２月26日より重機を用いた表土除去作業を開始し、地表より120㎝程の深さで遺構の分布を確認した。遺構はトレンチャーによる耕作作業などにより縞模様状に撹乱を受けていたが、遺存状態はいずれも比較的良好であり、27日までに円墳１基、土坑３基、ピット１基を検出することができた。円墳は墳丘と主体部が削平されていたが、周溝は全面にわたって残存しており、３月14日までには、周辺の土坑やピットを含めた遺構の調査をほぼ終了した。翌15日にはラジコンによる空中写真撮影及び写真測量を実施し、３月17日にはすべての作業を完了した。出土遺物は収納箱約５箱分にとどまったが、完形品を含む須恵器や土師器の一括遺物が少なからず発見されるなど、短期間の調査としては大きな成果をあげることができた。

１－３　整理等作業の経過

整理作業は平成19年３月25日より５月31日まで行った。３月22日から遺物の洗浄・注記・接合・復元作業を実施し、併行して、今回の調査では、セクションを除く遺構実測を主に写真測量にて行ったため、STP（デジタル図化解析機）による図化作業、写真整理作業を行った。

４月２日からは遺構図面の編集、遺物実測・トレース作業、写真撮影、図版作成、原稿執筆作業を行い、５月７日より31日まで報告書編集作業を行った。（大橋）

第２章　遺跡の位置と環境

２－１　地理的環境

辻ノ内遺跡は宇都宮市の中心部より約6.8㎞南西の西川田町辻ノ内に位置する。周囲は水田と畑地に新興住宅地が部分的に混在する田園地帯であるが、東側を県道２号宇都宮栃木線が走っており、西側約300mには栃木県子ども総合科学館が所在する。

宇都宮市は栃木県の県庁所在地で県を代表する都市である。県のほぼ中央に位置し、東京から北へ約100㎞、地形的には中央低地西端から足尾山地に連なる境界部を占めている。北西には足尾山地の東縁の一部である古賀志、半蔵、高館の各山地が控え、古賀志山地の南東側には大谷丘陵が連なる。ここから産出する緑色凝灰岩は「大谷石」の名で知られ、建築用石材として広く流通している。しかし市の大半は南北に流下する河川と、それに並行する台地や沖積低地で占められている。これ

第１図　辻ノ内遺跡の位置（国土地理院発行 1:50,000「宇都宮」に加筆）

第２図　辻ノ内遺跡周辺の地形
（栃木県埋蔵文化財調査報告第127集「辻の内遺跡・牧の内遺跡」より転載・一部修正）

らは東から清原台地（真岡台地・宝積寺段丘＝上位段丘面）、鬼怒川低地（絹島段丘＝下位段丘面）、岡本・田原台地（宝木段丘＝中位段丘面および田原段丘＝下位段丘面）、田川低地、宝木台地（宇都宮西部台地・宝木段丘）、姿川低地、鹿沼台地（宝積寺段丘＝上位段丘面）として分類されている。

本遺跡は宝木台地の西縁、標高約96mの台地上に立地する。今回の調査地点より500ｍほど北西には姿川が複雑に蛇行して流下している。現在は圃場整備により掘削され、姿川低地との比高はほとんどなく、ほぼ平坦な地形を呈している。しかし地元の古老によると、以前の地形は姿川低地に臨む地点で現在より２～３ｍ高く、東へ向かってなだらかな傾斜を示していたという。

本遺跡が位置する宝木台地は、東西の沖積低地に挟まれるように南北に長く伸びる。北端は今市扇状地の扇端にあたり、南部は雀宮、石橋（下野市）を越えて小山市・野木町にまで達する。この台地は宝木面に相当し、宝木層以上の火山灰を載せている。姿川は市北西部の半蔵山麓を源とし、蛇行しながら谷底平野を形成して市西部を南流している。この低地は東側の宝木台地と比高２～3mの崖線をもって接続しているが、西側の鹿沼台地との接続は10～30mの急崖となっており、姿川に沿って樹枝状に幅500～1300mで続いている。

（市瀬）

２－２　歴史的環境

辻ノ内遺跡が位置する宝木台地周辺は宇都宮市内でも有数の遺跡密集地帯として知られている。宝木台地は東側を田川低地、西側を姿川低地に挟まれるように広がっており、台地内部には鵜田川、西川田川、兵庫川などの小河川が形成した幅の狭い開析谷が樹枝状に入り込んでいる。遺跡の多くはこのような沖積低地や小支谷に沿った台地上に集中分布しており、時代的にも旧石器時代から近世に至るまで多岐にわたっている。

旧石器時代

本遺跡の周辺では、現在まで旧石器時代に属する遺跡の分布は未確認であるが、本遺跡の北方約８kmの姿川上流には上の原遺跡、西方約5kmには稲荷塚遺跡がそれぞれ所在する。前者からは黒曜石製のナイフや石核などが採集されている。また、後者では、栃木県運転免許センター建設に伴う発掘調査によってチャート製のナイフ形石器や削器、黒曜石製の削器、石核などがソフトローム～ハードローム層上面から検出されている。

第３図　辻ノ内遺跡と周辺の遺跡（国土地理院発行 1:50,000「宇都宮」に加筆）

第１表　辻ノ内遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	根拠	時代	No.	遺跡名	根拠	時代
1	御津城跡	城郭跡	中世	59	宮電山遺跡	集落跡・古墳・城郭跡	縄文・古墳・中世
2	宗尼神社跡	集落跡	縄文	60	江沿高北原遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
3	亀岡城古墳群	古墳	古墳	61	馬道遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
4	亀岡坪遺跡	集落跡	奈良・平安	62	江沿高北原西遺跡	集落跡	縄文・奈良
5	宗免古墳	古墳	古墳	63	おしの原遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
6	番頭遺跡	集落跡	奈良・平安	64	大原坪遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
7	福殿古墳群	古墳	古墳	65	城南三丁目遺跡	集落跡・古墳	古墳・平安・中世・近世
8	藤坪古墳	古墳	古墳	66	城南３丁目南遺跡	窯跡群	奈良・平安・中世
9	修原横穴墓	古墳	古墳	67	宮の内遺跡	窯跡群	縄文・古墳・奈良・平安・中世
10	横吉野台遺跡	窯跡群・古墳・横穴	縄文・古墳・奈良・中世	68	堀山北遺跡	窯跡群	古墳
11	犬飼城跡	城郭	中世	69	北若松原遺跡	窯跡群	古墳・平安
12	下矢北原遺跡	窯跡群	奈良・平安	70	原山古墳群	古墳	古墳
13	栗の内古墳	古墳	古墳	71	一向寺跡院付近遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳
14	宿坪遺跡	窯跡群	縄文・奈良・平安	72	曽西遺跡	集落跡	古墳
15	北宗内遺跡	窯跡群	奈良・平安	73	曽西南遺跡	集落跡	古墳・奈良
16	下横上愛宕塚古墳	古墳	古墳	74	若松原南遺跡	集落跡	古墳
17	ひのき西遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	75	曽宗東遺跡	散布地	奈良
18	下横上古墳群	古墳	古墳	76	東の宗原下ヨ遺跡	集落跡	古墳
19	下横上下の内遺跡	集落跡	縄文・古墳	77	曽宗駅東遺跡	集落跡	奈良
20	椿の内遺跡	集落跡	古墳	78	大谷原遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
21	栗の内遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	79	今塚東遺跡	窯跡群	縄文・弥生・古墳・奈良・中世
22	茶塚遺跡	集落跡	古墳	80	二子塚北遺跡	窯跡群	弥生・奈良・平安
23	ヤゲン山遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	81	二子塚古墳	古墳・散布地	縄文・弥生・古墳
24	亀塚古墳	古墳	古墳	82	天狗原遺跡	窯跡群	縄文・弥生・古墳
25	下台原古墳群	古墳	古墳	83	高の前遺跡	窯跡群	縄文・古墳・奈良
26	大名坪遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	84	宇都宮戦国南遺跡	窯跡群	古墳
27	遠久根遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	85	赤土山遺跡	集落跡	縄文・奈良
28	浜山遺跡	集落跡	古墳	86	多功神塚古墳群	古墳	古墳
29	宮の海道跡群	窯跡群・古墳	古墳・奈良・平安	87	宮土見遺跡北遺跡	集落跡	縄文・古墳
30	上原宮古墳	古墳	古墳	88	岡田山遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
31	花の木町遺跡	集落跡	古墳	89	渡原北原遺跡	集落跡	奈良
32	若松原遺跡	集落跡	縄文・古墳	90	石川坪遺跡	集落跡	縄文・奈良・中世・近世
33	二野屋遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	91	宮土見向山遺跡	集落跡	古墳・奈良
34	西原北遺跡	集落跡	縄文・古墳	92	明ノ内遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
35	起ヶ丘松地遺跡	窯跡群	縄文	93	西の前遺跡	集落跡	奈良
36	起ヶ丘平地北遺跡	窯跡群	縄文	94	上原遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
37	針ヶ谷新田古墳群	古墳	古墳	95	前畑遺跡	窯跡群	奈良
38	上坪新田遺跡	窯跡群	縄文・古墳・奈良	96	西下谷田遺跡	窯跡群	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
39	上坪遺跡	窯跡群	弥生・古墳・奈良	97	下谷田北原古墳	古墳	古墳
40	谷田古墳群	古墳	古墳	98	北原遺跡	窯跡群	古墳・奈良・平安
41	御仁城跡	城郭跡	中世	99	大本遺跡	窯跡群	古墳・奈良・平安
42	亀塚西遺跡	散布地	縄文	100	一本松遺跡	窯跡群	古墳・奈良・平安
43	毛塚西塚古墳	古墳	古墳	101	的林北遺跡	窯跡群	古墳・奈良・平安
44	愛宕塚下古墳群	古墳	古墳	102	上ノ原遺跡	窯跡群	弥生・古墳・奈良
45	風子塚古墳	古墳	古墳	103	若林南遺跡	集落跡	縄文
46	大山祇神社古墳	古墳	古墳	104	梅鬼山北遺跡	遺物散布地・窯跡群	旧石器・縄文・弥生・古墳・平安
47	十塚東古墳	古墳	古墳	105	小蓋遺跡	集落跡	奈良
48	彼女塚古墳	古墳	古墳	106	江原遺跡	集落跡	奈良
49	牛塚古墳	古墳	古墳	107	上神主・流原遺跡	集落跡・城郭跡	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・中世
50	雀塚山古墳群	古墳	古墳	108	渡原内原遺跡	集落跡	奈良・平安
51	大日塚古墳	古墳	古墳	109	後志部遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
52	愛宕塚古墳群	古墳	古墳	110	神宮寺遺跡	古墳	古墳
53	文殊山古墳	古墳	古墳	111	向原遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
54	本村遺跡	集落跡・古墳	縄文・弥生・古墳・中世・近世	112	向原南遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
55	駅南１丁目遺跡	集落跡	奈良・平安・中世	113	蔵山遺跡	窯跡群・散布地	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
56	ガンセンター東遺跡	集落跡	奈良・平安				
57	原原地遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安	114	合戸手遺跡	窯跡群	古墳・奈良・平安
58	蔵跡遺跡	集落跡	平安	115	後志部東遺跡	窯跡群	古墳・奈良・平安

縄文時代

本遺跡からはやや離れるが、草創期～早期の遺跡として、姿川上流の左岸に早期の人骨が出土した大谷寺洞穴遺跡がある。また、その下流には、半円状に分布する長方形大形住居や掘立柱建物群が検出された前期中葉の根古谷台遺跡（10）があり、中央の広場からは玦状耳飾や管玉などの装身具や副葬品を伴う墓壙群多数が発見されている。中期後葉～後期の遺跡としては、上欠団地造成に伴って調査された上欠遺跡があり、多数の住居群や配石遺構、屋外埋設土器などが検出されている。

この他、本遺跡近隣の当該期の遺跡としては、下砥上下の内遺跡（19）、二軒屋遺跡（33）、西原北遺跡（34）などがある。

弥生時代

本遺跡の周辺では弥生時代の遺跡の調査は十分になされていない。前出の二軒屋遺跡は弥生後期の二軒屋式土器の標式遺跡として著名であるが、正式の調査が行なわれないまま、周辺は宅地化が進んでしまったため、遺跡の詳細な内容は不明である。また、上坪遺跡（39）では弥生後期土器が出土している。

古墳時代

当該期の遺跡としては、古墳時代前期の集落跡が発見された花の木町遺跡（31）、古墳時代前期～平安時代の集落跡が発見された宮の森遺跡群（29）、古墳時代中期後半～後期の集落跡が発掘された本遺跡北側の柿の内遺跡（20）などがある。前代までに比べると遺跡数の増加はめざましく、また、花の木町遺跡のように、沖積低地中の微高地上に立地する例が認められるようになるのも大きな特徴である。この時代の集落跡は、上ノ原遺跡（102）、権現山北遺跡（104）、殿山遺跡（113）、雷電山遺跡（59）、向原遺跡（111）、向原南遺跡（112）、上神主・茂原遺跡（107）などでも確認されている。

一方、古墳の分布も顕著であり、本遺跡の東側には前方後円墳や帆立貝式前方後円墳を擁する塚山古墳群（70）、その南側には4基の円墳を擁する針ケ谷新田古墳群（37）などがある。塚山古墳群で現存する古墳は3基であるが、かつては20基以上の古墳が分布していたことが知られている。さらに本遺跡の南西には前方後円墳の亀塚古墳（24）があるが、前方部はすでに削平されており、後円部のみが現存している。塚山古墳群では塚山西古墳と塚山南古墳の一部の調査が行われ、出土した埴輪片などからおおむね5世紀後半～6世紀前半という構築時期が推測されている。また、針ケ谷新田古墳群でも2基の調査が行われ、7世紀前半に比定される横穴式石室が確認されている。

田川流域には茂原古墳群がある。複数の前方後方墳を擁しており、この中でも雷電山古墳は全長230 mの大前方後円墳である可能性が指摘されている。大正年間に大量の滑石製模造品が出土していること、後円部に対して前方部幅がかなり狭い墳形であるらしいことなどから、5世紀中葉ごろに位置づけられている。

奈良・平安時代

前出の根古谷台遺跡（10）からは奈良時代の住居や掘立柱建物跡が発見されている。また、本遺跡では3基の経塚が調査されており、うち1基からは「享禄2年」（1529年）の銘が刻まれた経筒が出土している。この他、集落跡と思われる遺跡としては、西の内遺跡（21）、大名神遺跡（26）、雀宮東浦遺跡（75）、雀宮駅東遺跡（77）、牛塚東遺跡（79）などがある。また、本遺跡では、今回の調査地点の北側から当該期の仏堂跡が発見されている。

中世

中世の城館跡としては、詳細は不明であるものの、宇都宮氏の有力支城といわれる犬飼城跡（11）や、樋口主計頭が城主であったと伝えられる樋口城跡（41）などがある。また、本遺跡では、今回の調査地点の北東側から当該期の掘立柱建物跡や墓壙などが発見されている。（小久）

第３章　調査方法と成果

３－１　調査の方法

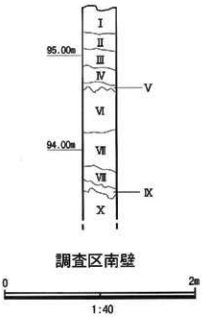
調査区の座標は公共座標（世界測地系）を基準に設定した。調査予定地は、当初、一辺 25 m程の方形を計画していたが、円墳の位置をもとに若干拡張した。総面積は 676 ㎡であり、対象地全域を網羅するように５m方眼のグリッドを設定した。

調査にあたっては、重機を用いて表土を除去した後、遺構確認面までは人力での掘り下げを行った。包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて３次元記録を実施した。また、遺構については、デジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては 35 ㎜モノクロフィルム、35 ㎜カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（500 万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。

（大橋）

３－２　基本土層

調査区の南東隅に基本土層観察のためのテストピットを深く設け、土層観察作業を行った。基本土層の概要は以下の通りである。



第４図　基本土層

Ⅰ層　耕作土層

Ⅱ層　10ＹＲ 2/2 黒褐色土層　ローム粒を少量含む。粘性に欠けるが、しまる。

Ⅲ層　10ＹＲ 2/3 黒褐色土層　ローム粒を少量含む。粘性をもち、しまる。

Ⅳ層　10ＹＲ 3/4 暗褐色土層　漸移層。ローム粒を中量含む。やや粘性をもち、しまる。

Ⅴ層　10ＹＲ 4/4 褐色土層　軟質ローム層。やや粘性をもち、しまる。

Ⅵ層　10ＹＲ 5/6 黄褐色土層　硬質ローム層。やや粘性に欠けるが、堅くしまる。

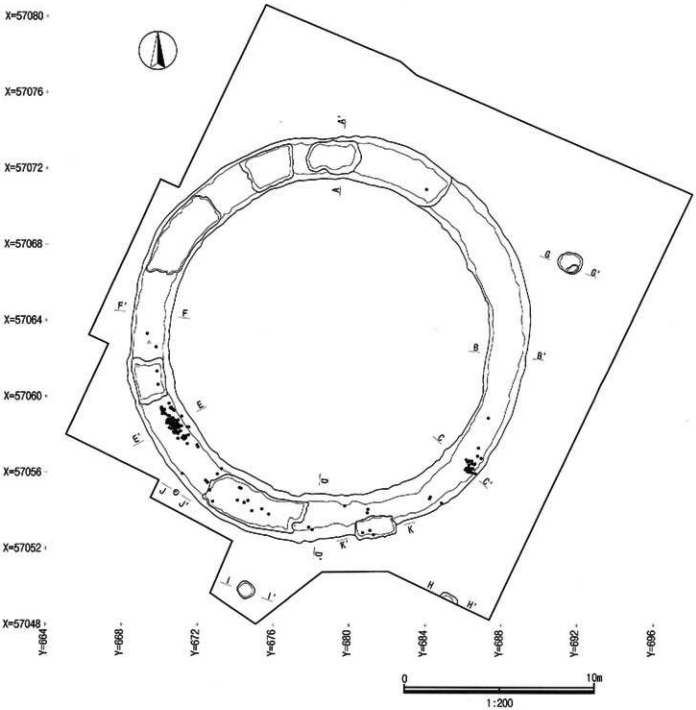
Ⅶ層　10ＹＲ 4/4 褐色土層　鹿沼軽石粒を少量含む。粘性をもち、堅くしまる。

Ⅷ層　10ＹＲ 3/4 暗褐色土層　鹿沼軽石粒を少量含む。粘性をもち、堅くしまる。

Ⅸ層　10ＹＲ 2/3 黒褐色土層　鹿沼軽石粒を多量混入。粘性に欠けるが、しまる。

Ⅹ層　7.5ＹＲ 6/8　鹿沼軽石（ＫＰ）層。やや粘性・しまりに欠ける。

（市瀬）


X=57080
X=57076
X=57072
X=57068
X=57064
X=57060
X=57056
X=57052
X=57048
Y=664
Y=668
Y=672
Y=676
Y=680
Y=684
Y=688
Y=692
Y=696
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
I
I'
J
J'
K
K'
0
10m
1:200

第５図　調査区全体図

3－3　遺構

調査区は、試掘で確認された古墳全体を網羅するように設定した。東西約29m、南北約25mを測る、やや不整な方形を呈する。北西から南東方向へほぼ1m間隔でトレンチャーが全面に入っていたが、確認面からの深さは10cm程度であり、墳丘が削平されている以外は、遺構の保存状態は比較的良好であった。

検出された遺構は古墳1基（円墳の周溝のみ残存）、土坑3基、ピット1個であった。

（1）1号墳

形状　墳丘の直径約17m、周溝幅1.8～2.8mの円墳である。周溝をも含めた最大径は21.4mを測る。墳丘は完全に削平されており、周溝のみ検出された。主体部についても完全に削平され、痕跡は確認できなかった。

周溝　幅1.8～2.8m、深さ0.3～0.7mを測る。幅は南西部でやや広く2.8m、南東部でやや狭くなり1.8mとなるが、概ね2.2m前後の幅で構築されている。深さは、最深部の北側で0.7m、北西部では0.3mとやや浅くなっている。底面の標高は94.0～94.4mである。溝底は東半部ではおおむね平坦であったが、西半部は比較的起伏をもち、周溝掘削時に掘りすぎた部分をロームブロックなどで埋め戻したような掘り込みも何箇所か認められた。壁面は、墳丘側では傾斜が緩やかであるが、外側は急傾斜で立ち上がっている。南側では、壁面の上部が小テラス状を呈している部分も認められた。

周溝内覆土　3層に分けられる。第1層および第2層に混入した白色粒子は、周辺遺跡の報告や今回出土した土器の時期などから、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）とみられる。遺跡によっては遺構覆土中に2cm以上もの堆積が見られる例もあるが（註1）、本遺跡の遺構ではそのような堆積は見られなかった。圃場整備の際に上面が大きく削平されたためとみられる。

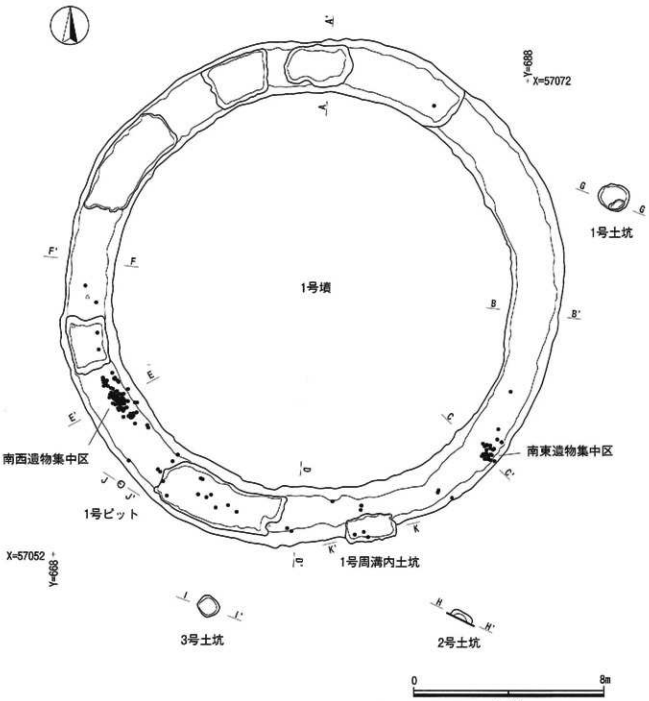
第1層　10YR2/1黒色土層　ローム粒を微量、白色粒子を少量含む。粘性をもち、しまる。

第2層　10YR2/2黒褐色土層　ローム粒を少量、白色粒子を微量含む。やや粘性・しまりをもつ。

第3層　10YR3/4暗褐色土層　ローム粒を多量、ロームブロックを中量含む。粘性をもち、ややしまる。

1号周溝内土坑　周溝南東部に位置する。周溝に沿って、外壁を一部切り込むように構築されている。平面形は長方形を呈し、長径219cm、短径118cm、深さ70cmを測る。主軸方向はN－82°－Eである。断面は筒状に近く、壁は急傾斜で立ち上がる。坑底はほぼ平坦である。覆土の状況から、少なくとも周溝が第1層上面まで埋没した後に掘り込み、構築されたものと思われる。棺の使用痕跡は確認されなかったが、土坑の形状や遺物の共伴などから周溝内埋葬施設と思われる。遺物は覆土中位より和泉系の土師器鉢が2点出土している。伴出土器などから判断すると5世紀末の所産と思われる。

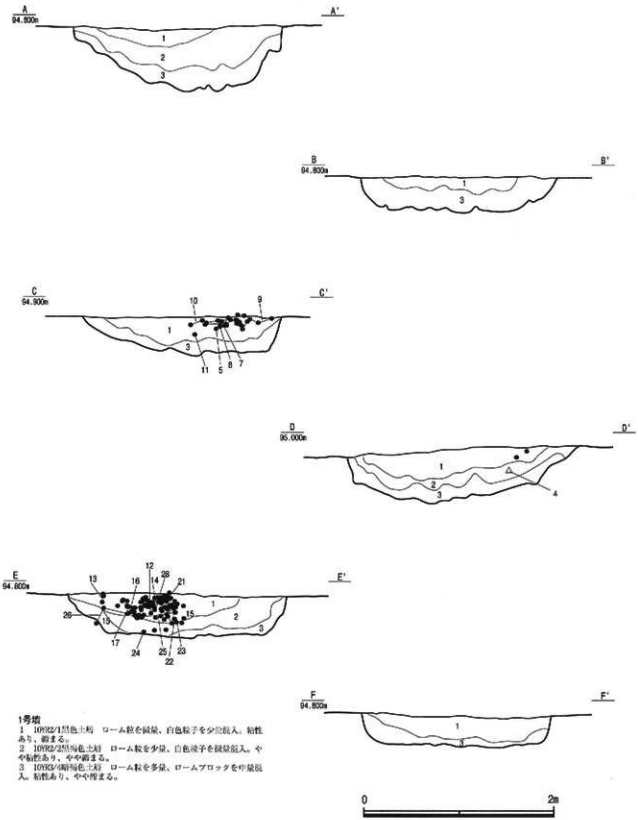
出土遺物　須恵器坏蓋2点、坏身2点、甕2点、甕2点、土師器壺2点、坏3点、高坏7点、鉢4点、滑石製紡錘車1点の他、流れ込みと思われる縄文土器7点、削器1、台石1点が周溝内より出土している。周溝の南東部と南西部の2箇所に集中的に分布している。このうち、南東遺物集中区では特に須恵器の出土が顕著であり、須恵器の坏蓋2点、坏身2点、大甕2個体分の破片、甑1点が出土している。いずれも周溝覆土の第1層中から出土しており、周溝が埋まりかけた時点で、一括して廃棄されたものと思われる。時期的には5世紀末～6世紀前半のものが大半であった。一方、南西



第６図　１号墳平面図

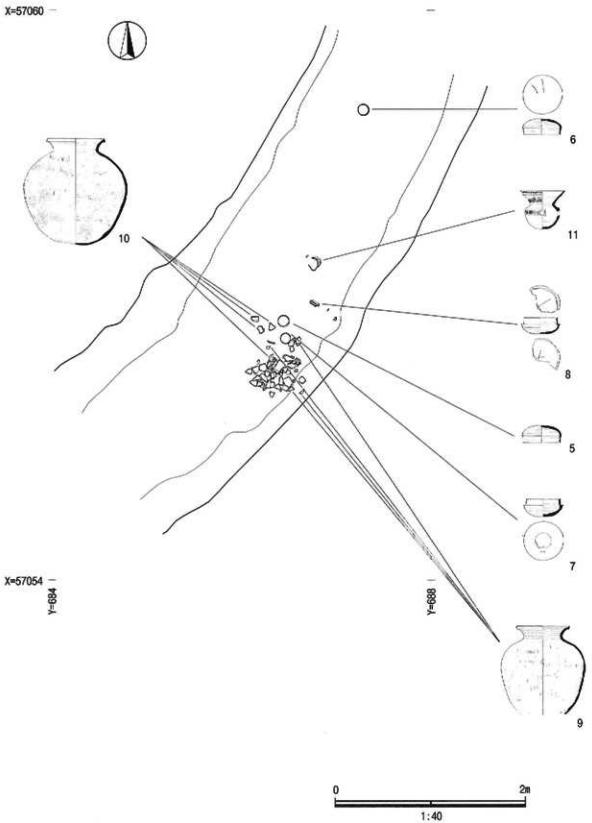
遺物集中区では土師器類を主体とした遺物の出土が認められた。内訳は、須恵器の甕１点、土師器壺２点、坏３点、高坏７点、鉢１点である。第２層中から出土したものが大半であり、周溝が半分以上埋没した時点で、一括して廃棄されたものと思われる。時期的には、６世紀前半に比定される須恵器を除くと、５世紀後半のものが大半であり、南東遺物集中区より先行するものと推定される。石製紡錘車は南西遺物集中区の北側から発見されている。

時期　古墳の構築時期を示す資料はみられないが、周溝内出土土器などから判断して５世紀後半頃の所産と思われる。

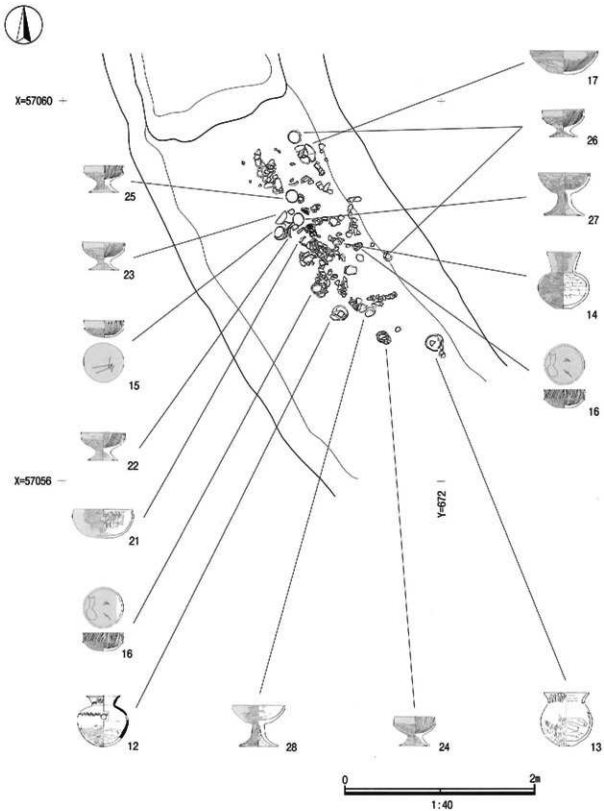


1号墳
1　10YR2/1黒色土層　ローム粒を微量、白色粒子を少量混入。粘性あり、締まる。
2　10YR2/2黒褐色土層　ローム粒を少量、白色粒子を微量混入。やや粘性あり、やや締まる。
3　10YR3/4暗褐色土層　ローム粒を多量、ロームブロックを中量混入。粘性あり、やや緩まる。

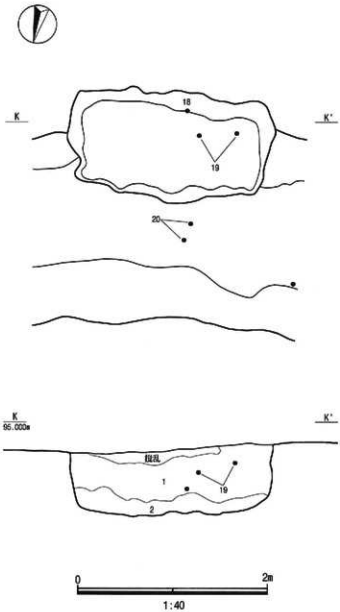
第７図　１号墳周溝断面図



第８図　南東遺物集中区


X=57060
X=57056
Y=672
17
26
25
27
23
14
15
16
22
21
16
12
28
24
13
0
2m
1:40

第９図　南西遺物集中区



1号周溝内土坑
1　10YR2/2黒褐色土層　ローム粒を少量、白色粒子を微量混入。粒土あり、締まる。
2　10YR2/3黒褐色土層　ローム粒を多量、ロームブロックを少量、白色粒子を微量混入。粘性あり、締まる。
3　10YR3/4暗褐色土層　ロームブロックを微量、黒褐色土を少量混入。やや粘性あり、やや締まる。

第10図　1号周溝内土坑

（2） 土坑・ピット

1号土坑

調査区の北東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径132㎝、短径108㎝、深さ40㎝を測る。主軸方位はN－84°－Wである。断面は鍋底状を呈し、坑底は丸みをもつが、南側が一段低くなる。遺物の出土はみられなかった。時期は不明である。

2号土坑

調査区の南東端に位置する。一部が調査区域外にかかるため、全容は不明であるが、平面形は円形ないし不整楕円形を呈するものと思われる。確認部分の長径は103㎝、深さ71㎝を測る。断面は鍋底状を呈し、坑底は丸みをもつ。遺物の出土はみられなかった。Ⅱ層上面より掘り込まれており、近世以降の所産と考えられる。

3号土坑

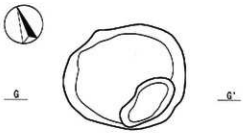
調査区の南側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長径90㎝、短径84㎝、深さ26㎝を測る。主軸方位はN－47°－Wである。断面は鍋底状を呈し、坑底は丸みをもつ。遺物の出土はみられなかった。時期は不明である。

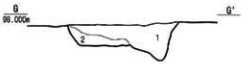
1号ピット

調査区の南西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径28㎝、短径27㎝、深さ25㎝を測る。遺物の出土はみられなかった。時期は不明である。

（小野・市瀬）

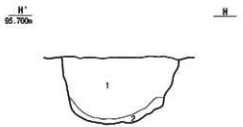
（註1）昭和62・63年度の調査時に、本遺跡の試掘坑で検出されている。また、同時に隣接する柿の内遺跡の住居跡覆土からもHr-FA火山灰層が検出されている。また本遺跡より南東へ約6.5kmの立野遺跡では、5区で検出された住居跡の覆土中に2㎝の火山灰堆積層を見出している。この層は住居址床面直上の黒色土層の上にあり、黄色を帯びた灰色をしていた。また重鉱物として斜方輝石や角閃石が含まれていた。これらのことから、火山灰がHr-FAで、住居の廃絶がその降下時期である6世紀初頭より以前であることを報告している。





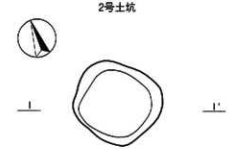
1号土坑

1号土坑
1　10YR2/3黒褐色土層　ローム粒を中位、赤色粒子を微量、白色粒子を微量混入。やや粘性あり、やや硬まる。
2　10YR4/6褐色土層　ローム主体。1層の粒子やブロックを少量含む。やや粘性あり、やや硬まる



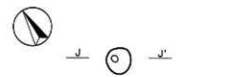
2号土坑

2号土坑
1　10YR2/1黒色土層　ローム粒を少量、白色粒子を微量混入。粘性あり、硬まる。
2　10YR2/3黒褐色土層　ローム粒を中位混入。粘性あり、硬まる。



3号土坑

3号土坑
1　10YR2/2黒褐色土層　ローム粒子を中位、ロームブロックを少量混入。やや粘性あり、やや硬まる。



1号ピット

1号ピット
1　10YR2/2黒褐色土層　ローム粒を多量混入。粘性あり、硬まる。
2　10YR2/2黒褐色土層　ロームブロック、ローム粒を少量混入。粘性あり、やや硬まる。

0　2m

第11図　1～3号土坑・1号ピット

3－4　遺物

今回の調査では縄文土器、石器、土師器、須恵器、陶器、紡錘車、五輪塔部材などが遺物収納箱にして5箱分、点数にして51点出土した。大部分が古墳周溝内からの出土である。遺物は土師器と須恵器が大部分を占める。完形で出土した例が多く、作りも丁寧なものが大半である。

縄文土器は7点出土している。いずれも周溝内で確認されており、流れ込みと考えられる。図示した2点は中期初頭、五領ヶ台式に併行するものと思われる。石器として黒曜石製の削器3も縄文時代のものと思われる。台石と思われる4については、正確な時期は不明である。

須恵器は坏蓋2点、坏身2点、甕2点、甕2点出土している。南東遺物集中区より出土したものが大半である。坏蓋は5と6、坏身は7と8であり、このうち5と7は組み合う。また、7と8はヘラ記号がみられる。甕9と10のうち、10は胴部外面のカキ目が9より弱い。甕11と12のうち、11は比較的小型の甕である。唯一、南西遺物集中区から出土している。ともに自然釉が大量にかかり、全体的にオリーブ色が強い。以上の須恵器の年代であるが、甕11は肩の張り方や口縁部や胴部の形状から陶邑中村編年のⅠ－4段階相当の5世紀後半、甕12はⅠ－5段階相当の5世紀末頃から6世紀前半頃と考えられる。また、坏も口縁部形状から同じ様にⅠ－5段階相当の5世紀末頃から6世紀前半頃と考えられる。これらの須恵器は胎土・色調・調整方法などから東海系の須恵器と思われるが、当該期の須恵器窯の詳細が明らかではないため、それ以上の言及はできない。

土師器は壺2点、坏3点、高坏7点、鉢4点が出土している。坏、高坏は完形のものが多い。坏15の器形は高坏の23の坏部と同形である。坏16は15と調整や形状は同等であるが、体部が直線的に上部へ立ち上がる。高坏22･25･26の坏部と同形である。15と16は双方共に赤彩が施されている。鉢18と19は所謂和泉系の鉢である。体部は球胴状を呈し、19は口縁部が僅かに開く。18は1号周溝内土坑から出土した。21の鉢はやや内湾する。高坏は、形態的に坏部が鬼高系の系譜をひくもの（22・23・24・25・26）と和泉系の系譜をひくもの（27・28）に分かれる。鬼高模倣坏系高坏は坏部の立ち上がりからａ、ｂ、ｃの3種に分類できる。ａとｃは口縁部の立ち上がりと稜直上の調整以外、同形態であるが、ａの23は立ち上がりが僅かに外反する。ｂの22・25・26の立ち上がりは直線的で、稜の直上に強い横方向ナデを施す。ｃの24は立ち上がりは内湾し、稜の直上に強い横方向ナデを施す。以上、鬼高系高坏の坏部は内湾する古いものから外反する新しいものが混在している。坏部和泉系の高坏27・28は双方ともほぼ同形である。この2点は坏部鬼高系高坏より器高が高い。土師器はほぼ南西遺物集中区より出土しており、須恵器が集中する南東遺物集中区より標高にして約10～20㎝低い。模倣坏や高坏の坏部の形状、調整などから、陶邑中村編年のⅠ－4段階ないし5段階相当の5世紀後半を中心とした年代を与えることができるものと思われる。また、1号周溝内土坑出土の18は、形状からも他の遺物より和泉期に近いと思われる。

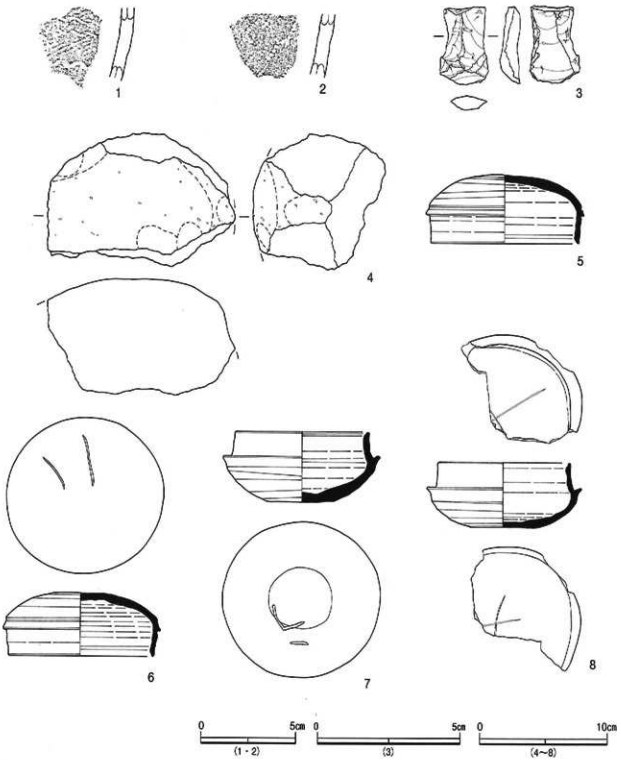
滑石製紡錘車29は周溝底部からの出土である。断面台形、斜辺に調整痕が良く残る。中央部に径0.9㎝の孔を有する。

この他、近世の遺物として五輪塔水輪部30が1点表土より出土している。凝灰岩製であり、全面的に風化が進んでいる。

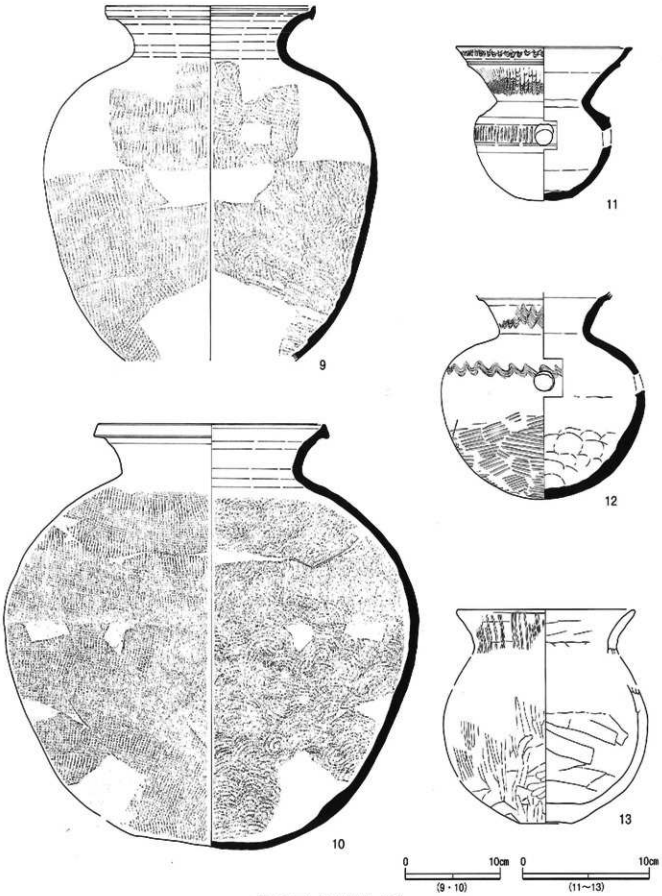
近隣の古墳出土遺物を見ると、東谷・中島地区遺跡群の1・3号墳の遺物と甕11の形状や坏の形状に類似点が多く見出され、ほぼ同時期のものと思われる。同報告によると3号墳は5世紀末から6

世紀初頭の造営とされている。前述した行為が東谷・中島地区遺跡群の1・3号墳と同一時期に行われたと思われる。

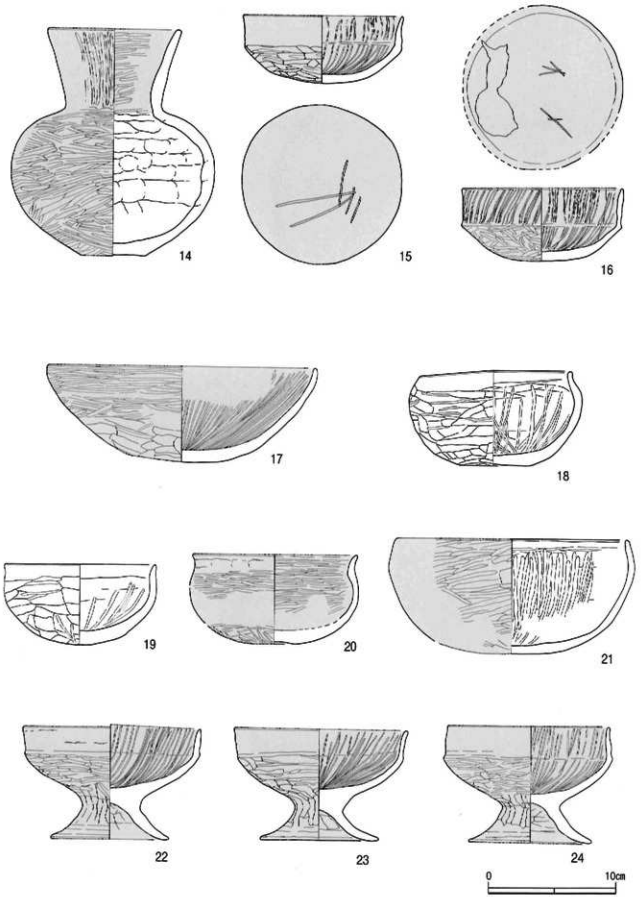
（林）



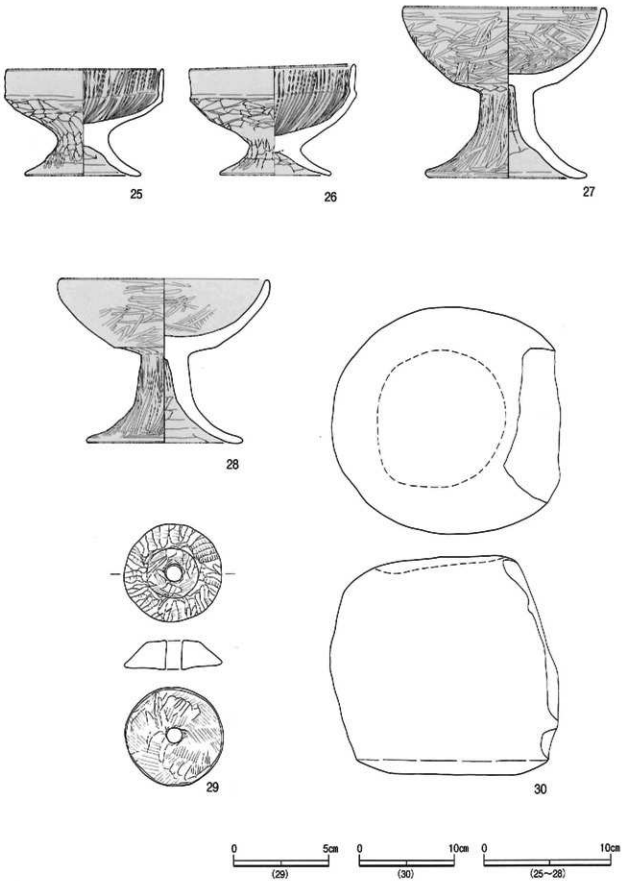
第12図　出土遺物（1）



第13図　出土遺物（2）



第14図　出土遺物（3）



第15図　出土遺物（4）

第2表　出土土器属性一覧

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	1号竪穴群	縄文土器	深鉢	胴部片	-	-	-	-	結節縄文縦走	白・黒色粒子少量、雲母中位、砂礫中量	普通	明赤褐色	中期・五領ヶ台式併行
2	1号周溝群	縄文土器	深鉢	胴部片	-	-	-	-	LR縄文	白・黒色粒子少量、雲母中位、砂礫中量	普通	明赤褐色	中期・五領ヶ台式併行
5	1号墳周溝	須恵器	坏蓋	完形	100	11.6	-	5.3	口縁部端発かに外反、天井部丸み、体部周縁ヘラケズリ、後軸くびれ+直上近傍1条、口縁部ヨコナデ、体部内面円形に指ナデ	白・黒色粒子微量、石英微量、黒色物	良好	明オリーブ灰色	南東遺物集中区、東海系、7と組み合う
6	1号竪穴群	須恵器	坏蓋	完形	100	11.3	-	5.0	口縁部端発かに外反、体部周縁ヘラケズリ、後・短く鋭い・直上1条の沈線、口縁部ヨコナデ、体部内面円形に指ナ	白・黒色粒子微量、石英微量、黒色物	良好	オリーブ灰色	南東遺物集中区、東海系、へラ記号
7	1号竪穴群	須恵器	坏身	完形	100	10.4	4.9	5.5	口縁部体部の1/2よりやや内側に傾いた後ほぼ直線的に立ち上がる、口唇部：鋭くと方につまれる、口縁部ヨコナデ、体部周縁ヘラケズリ、底部ヘラケズリ、平底	白・黒色粒子微量、黒雲母少量	良好	明オリーブ灰色	南東遺物集中区、東海系、5と組み合うへラ記号、外面漆付着
8	1号周溝群	須恵器	坏身	口縁部～底部片	40	(10.2)	5.0	5.1	口唇部体部の1/2よりやや内側に傾いた後ほぼ直線的に立ち上がる、口唇部：鋭くと方につまれる、口縁部ヨコナデ、体部周縁ヘラケズリ、底部ヘラケズリ、平底	白・黒色粒子微量	良好	明オリーブ灰色	南東遺物集中区、東海系、見込部・底部へラ記号「×」
9	1号墳周溝	須恵器	甕	口縁部～胴部片	30	(22.0)	-	(36.7)	球胴状、最大径胴部上位、口縁部大きく外反し、端の稜線、口縁部正面下字状、胴部：外面格子目タタキ後右から左への斜方向ナデ目、内面同心円状タタキ目、外面白然釉	白色粒子微量	良好	黒体：灰色～黒灰色輪：オリーブ色	南東遺物集中区
10	1号竪穴群	須恵器	甕	胴部～頸部片	40	(24.0)	-	(64.4)	球胴状、最大径胴部中央、頸部：外面格子目タタキ後ヘラケズリ、内面の横方向ナデ目、内面同心円状タタキ目、粉吹状	白色粒子微量	良好	暗灰色	南東遺物集中区
11	1号墳周溝	須恵器	甕	口縁部～底部片	95	13.9	-	12.0	口唇部に最大径をもち、続かせに外反、胴部やや肩を張る。丸底。口唇部やや外側につまれる。口縁部上端よりI/3に続をもち、口唇部と肩の間に3本1単位のV字文、櫛下段に波状文、胴部以前に横方向平行線3、それに波状をあるように回転かき目。胴部及び頸部かき目下段に弱い横、回転かき目上に斜方向草刈、自然釉外面口唇部から胴部、内面口縁部、胴部中位から底部にかけてかかる	白・黒色粒子微量、砂礫少量	良好	黒体：灰色輪：暗オリーブ色	南東遺物集中区、東海系、小型壺、陶器1-4段階相当、5世紀後半
12	1号周溝群	須恵器	甕	口縁部～底部片	80	-	-	(16.2)	最大径胴部中央、口縁部強く外反しながら立ち上がる、丸底、やや球胴状、口縁部：下段波状文、その上位に櫛、胴部：2/3に波状文、そこから下位斜方向平行文状のタタキ目、最不明瞭、波状文上に斜方向草刈、自然釉：外面口縁部から胴部中位、内面口縁部、胴部中位から底部にかかる	白・黒色粒子微量、砂礫少量	良好	黒体：灰色輪：オリーブ灰色	南西遺物集中区、東海系、陶器1-5段階相当、5世紀末から6世紀前半
13	1号周溝群	土師器	甕	胴部～底部片	50	(13.8)	4.4	(16.7)	球胴状、胴部手持ち横方向ヘラケズリ後ミガキ	白・灰色粒子少量、石英・長石・雲母微量、砂礫中量	普通	明赤褐色	南西遺物集中区
14	1号墳周溝	土師器	甕	口縁部～底部片	70	(11.0)	5.0	17.8	球胴状、口縁部強かに外反しながら直線的に立ち上がる、口縁部端丸、口唇部内側肩方向へヨコナデ、外面口唇ヨコナデ後縦方向へヨコミガキ、胴部手持ち横方向ヘラケズリ後ヘラミガキ	白色粒子微量、砂礫微量	普通	にぶい褐色	南西遺物集中区、布留系、内外部赤彩
15	1号竪穴群	土師器	坏	完形	100	12.5	-	5.3	体部1/2から徐かに外反し立ち上がる、体部1/2明瞭、丸底、外面横方向手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、見込み部ナデ、横方向ヘラミガキ、内外面に赤彩	白・黒色粒子微量、雲母微量	良好	赤褐色	南西遺物集中区、布留系ヘラ記号、鬼高系模倣坏、内外面赤彩
16	1号竪穴群	土師器	坏	口縁部～底部片	80	12.5	-	5.3	口縁部直線的に立ち上がる、坏部：口縁部ヨコナデ、外面横方向手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ、内面横方向ヘラミガキ、後体部1/2明瞭、直上強い横方向ナデ、内外面に赤彩	白・黒色粒子微量、雲母微量	良好	赤褐色	南西遺物集中区、鬼高系模倣坏、内外面赤彩、黒斑
17	1号周溝群	土師器	坏	口縁部～体部片	80	21.3	-	7.5	底部より内弯しながら立ち上がる、平底、底部手持ヘラケズリ、体部横方向手持ちヘラケズリ後横方向ヘラミガキ、内面：2条1単位の放射状ミガキ、口縁部ヨコナデ、体部内面：ミガキ	白・灰色粒子少量、石英・長石・雲母微量、砂礫中量	良好	にぶい黄橙色	南西遺物集中区、内外面赤彩
18	1号周溝内土坑	土師器	鉢	完形	100	12.1	5.4	7.4	球胴状、平底、口縁部ヨコナデ、胴部外面横方向ナデ、内面横ヘラミガキ	白色粒子中量、黒色粒子微量、石英少量、長石微量、雲母少量	良好	明赤褐色	和泉系
19	1号周溝内土坑	土師器	鉢	口縁部～底部片	50	(11.7)	-	6.3	体部緩膨状で口縁部徐かに開く、平底、口唇部ヨコナデ、体部外面横方向ヘラケズリ、内面縦方向ヘラミガキ、底部ヘラケズリ、やや粗な	白・黒色粒子、雲母微量	普通	明黄褐色	和泉系

20	1号炉跡内土坑	土師器	鉢	口縁部～底部片	80	12.8	3.6	7.0	体部球胴状で口縁部大きく外側に開く，平底，口縁部ヨコナデ，体部外面手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ，内面ナデ・ミガキ，底部ヘラケズリ，やや張る	白・黒色粒子，砂礫微量	普通	明黄褐色	和歌系，内外面赤彩
21	1号炉跡周溝	土師器	鉢	口縁部～底部片	50	(18.0)	-	(9.0)	底部より内彎しながら立ち上がる，口縁部端丸，平底，外面手持ちヘラケズリ，内面ヘラミガキ，口縁部ヨコナデ，体部内面ナデ，ミガキ	白・灰色粒子少量，石英・長石・雲母微量，砂礫中位	普通	にぶい黄橙色	南西道物集中区，外面赤彩
22	1号炉跡周溝	土師器	高坏	完形	100	12.5	9.4	9.1	口縁部直線的に立ち上がる，口縁部端丸，不蓋 口縁部ヨコナデ，外面縦方向手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ，内面縦方向ヘガキ，稜体部1/2潰圧，直上強い横方向ナデ，脚部ハ字状脚裾，外面横方向ヘラミガキ，内面加板ナデ	白・黒・赤色粒子微量	良好	明赤褐色	南西道物集中区，不蓋鬼高系模倣坏，内外面赤彩
23	1号炉跡周溝	土師器	高坏	完形	100	13.6	9.2	8.8	口縁部低さに内湾しながら立ち上がる，不蓋口縁部ヨコナデ，体部外面手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ，体部内面縦方向ヘラミガキ，稜部1/2潰圧，脚部ハ字状脚裾，外面横方向ヘラ，内面加板方向ナデ	白・黒色粒子微量	良好	赤褐色	南西道物集中区，不蓋鬼高系模倣坏
24	1号炉跡周溝	土師器	高坏	略完形	95	12.5	9.4	9.1	口縁部低さに内湾しながら立ち上がる，坏部：口縁部ヨコナデ，体部外面手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ，体部内面縦方向ヘラミガキ，稜体部1/2潰圧，直上強い横方向ナデ，脚部：ハ字状脚裾，外面縦方向ヘラミガキ，内面加板ナデ	白・黒色粒子微量，長石・雲母微量	良好	赤褐色	南西道物集中区，坏部鬼高系模倣坏，内外面赤彩
25	1号炉跡周溝	土師器	高坏	略完形	95	12.3	8.9	8.4	口縁部直線的に立ち上がる，坏部：口縁部ヨコナデ，外面縦方向手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ，内面縦方向ヘラミガキ，稜体部1/2潰圧，直上強い横方向ナデ，脚部：ハ字状裾脚，外面横方向ヘラミガキ，内面加板ナデ	白・黒・赤色粒子微量	良好	にぶい赤褐色	南西道物集中区，坏部鬼高系模倣坏，内外面赤彩
26	1号炉跡周溝	土師器	高坏	略完形	95	13.0	8.6	8.7	口縁部直線的に立ち上がる，口縁部端丸，坏部：口縁部ヨコナデ，外面縦方向手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ，内面縦方向ヘラミガキ，稜体部1/2潰圧，直上強い横方向ナデ，脚部：ハ字状裾脚，外面縦方向ヘラミガキ，内面加板ナデ	白・黒・赤色粒子微量	良好	明赤褐色	南西道物集中区，不蓋鬼高系模倣坏，内外面赤彩
27	1号炉跡周溝	土師器	高坏	略完形	95	15.9	12.4	13.3	口縁部緩やかに内湾しながら立ち上がる，坏部：口縁部ヨコナデ，内外面ヘラミガキ・多方向ミガキ，脚部：ハ字状裾脚，外面縦方向ヘラケズリ，縦方向ヘラミガキ，内面：斑板ナデ	白・赤色粒子微量，石英・長石・砂礫微量	良好	明赤褐色	南西道物集中区，坏部鬼高系模倣坏の高坏より器高高い
28	1号炉跡周溝	土師器	高坏	口縁部～脚部片	60	16.3	12.2	12.8	口縁部緩やかに内湾しながら立ち上がる，坏部：口縁部ヨコナデ，内外面ヘラミガキ，底部：浮上ヘラ切り，脚部：ハ字状裾脚，外面縦方向ミガキ，内面：面板ナデ	白・赤色粒子微量，石英・長石・砂礫微量	良好	明赤褐色	南西道物集中区，坏部鬼高系模倣坏の高坏より器高高い，内外面赤彩

第３表　出土石器・石製品属性一覧

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴・手法	備考
3	1号墳周溝	石製品	前垂	-	2.7	2.7	1.7	0.7	玦状耳の縦長剥片転用。腹面有傾斜に近続した二次加工。腹面側には三角調整痕を切る細然石状の調整痕	黒曜石
4	1号墳周溝	石製品	台石？	-	-	(14.7)	(10.3)	482.0	表裏全面に擦痕	砂岩
29	1号墳周溝	石製品	紡錘車	完形	上部径2.8 cm，底部径5.2 cm	-	1.5	46.0	短冊台形，斜面敲整痕 上下面から穿孔	孔径0.9 cm，滑石製
30	表採	石製品	五輪塔	-	23.0	24.2	23.9	10500.0	水輪部，断面隅丸方形	凝灰岩

第４章　総括

今回の調査では、古墳１基、周溝内土坑１基、土坑３基、ピット１基などが確認された。古墳の墳丘そのものは、近現代の圃場整備により大きく削平され、確認面に埋葬施設の痕跡もなく、周溝のみの検出となった。しかも調査区全体にトレンチャーが縞状に入っていたが、確認面から10cmほどで止まっていたため、周溝から出土した遺物は総じて良好な遺存状態にあった。

１号墳は直径17mの円墳で、周溝幅は1.8～2.8m、深さは0.3～0.7mを測る。周溝北東部の一帯が浅く、南西部から南東部にかけて深くなっている。周溝内は、特に北部周辺に削り残し状の凹凸などがあり、溝底は均一に平坦な構造ではない。

周溝南側に位置する１号周溝内土坑は、周溝が少なくとも第１層上面まで埋没した時点で構築されたと推定される。和泉系の土師器鉢の出土と、規格的な長方形のプランから、埋葬施設であった可能性が高いものであり、時期は５世紀末と推定される。

周溝内遺物は南西と南東の２箇所から集中的に出土した。このうち、土師器の模倣坏や高坏を主体とする南西遺物集中区が、陶邑中村編年のⅠ－４ないし５段階に相当する５世紀後半項を中心としてやや先行しており、層位的にも２層を中心に一括廃棄された分布状態を示していた。遺物構成をみると、須恵器が廻１点のみで、坏３点、高坏７点、鉢１点、壷２点と土師器が大きく上回る。中でも、高坏の割合が非常に多い点に注意したい。これに対し、須恵器のみで構成される南東の遺物集中区は上位の１層を中心に一括廃棄されたような分布状態を示しており、南西遺物集中区よりも新しい５世紀末から６世紀前半という年代が推測された。須恵器の構成は坏蓋２点、坏身２点、大甕２点である。これらのことから、１号墳では、時期をややずらして、前後二回にわたる祭祀が行われ、それに伴う形で須恵器や土師器の一括廃棄が行われたものと考えられる。また、古墳の築造年代も、以上の諸点から、南西遺物集中区が形成された５世紀後半、もしくはそれを若干遡る時期に比定されるものと思われる。

隣接する遺跡との関係をみると、本調査地点より北東300mほどの地点に辻ノ内遺跡が所在している。また、その北側に、鵜田川を挟んで柿の内遺跡が所在する。両者とも縄文前期中葉～近世に至る複合遺跡であるが、その中心は古墳時代後期～平安時代の集落である（（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992）。このうち、本古墳に相当する時期のものとしては、柿の内遺跡で古墳時代中期後半の住居が１軒、中期末～後期初頭が１軒、後期初頭が２軒確認されている。辻ノ内遺跡では、古墳時代前期の住居が１軒検出されている他は、発見された住居はいずれも後期前半以降のもので占められている。また、本遺跡の南西250mの地点に花の木町遺跡が所在しているが、その主体は、古墳時代前期～中期の過渡期に比較的短期間に形成された集落である（（財）栃木県文化振興事業団1988）。

こうした周辺遺跡のあり方を踏まえると、柿の内遺跡と本古墳との関係が注目されるが、両者は直線で800m以上の距離があり、かつ間に鵜田川を挟んでいる点などから、別個のものと見るべきかもしれない。むしろ、古墳時代前期から後期へと継続して営まれている、近接する辻ノ内遺跡の集落において、明確な中期の住居がたまたま発見されていない可能性と、近隣に未発見の遺跡がある可能性の、双方を想定しておきたい。

なお、過去３次にわたる辻ノ内遺跡の発掘調査では古墳は未発見であり、今回の調査例がはじめての発見例となる。未調査のため、年代は不明であるが、南東200mほどの地点に所在する星宮神社境内の古墳と共

に、同一古墳群としての関連性が注目されるところである。

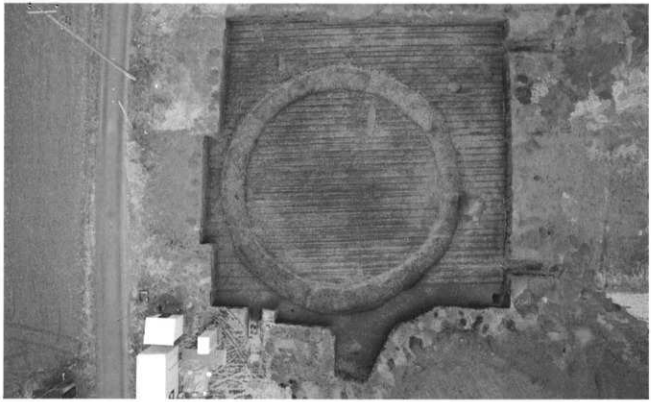
今回の調査地点から北東750mほどの一帯は字名を三ッ塚といい、かつては栃木街道に沿った宿場町が形成されていた。ここには、巨人が黄金を埋めた三つの塚を築き、発覚を恐れて夜分に一つを壊してしまったという三ツ塚伝説が残されている（小平1980）。この塚は現存していないが、かつてこの地に多くの塚があったことを偲ばせる記述である。

（小野）

参考文献

阿部知己	1998	「小規模古墳における周溝内大型土坑に関する一考察」『峰考古』13号　宇都宮大学考古学研究会
阿部茂・芹澤清八・熊谷淳	1992	『辻の内遺跡・柿の内遺跡』　栃木県埋蔵文化財調査報告第127集　栃木県教育委員会
宇都宮市史編纂委員会	1979	『宇都宮市史　原始・古代編』　宇都宮市
宇都宮大学考古学研究会	2003	『塚山西古墳・塚山南古墳』　宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集　宇都宮市教育委員会文化課
内山敏行	2005	『東谷・中島地区遺跡群5　立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第290集　栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
内山敏行	2006	『東谷・中島地区遺跡群7　磯岡北古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第299集　栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
上三川町史編纂委員会	1979	『上三川町史　資料編　原始・古代・中世』　上三川町
木村等	1981	『辻の内遺跡』　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
小平章三	1980	『西川田村史』　西川田村史刊行会
後藤信祐	1988	『花の木町遺跡』　栃木県埋蔵文化財調査報告第83集　栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
下野地学会	1979	『栃木の地質をめぐって』　悠地書館
進藤敏雄	2000	「栃木県の群集墳－古式古墳の動向について」『群集墳の時代－しもつけにおける成立と展開－』　栃木県教育委員会
常川秀夫・大金宣亮・石川均・熊倉直子	1979	『塚山古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第32集　栃木県教育委員会
栃木県教育委員会	1979	『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』　栃木県埋蔵文化財調査報告第26集
栃木県教育委員会	1988	『栃木県埋蔵文化財保護行政年報　昭和62年度』栃木県埋蔵文化財調査報告第99集
栃木県教育委員会	1989	『栃木県埋蔵文化財保護行政年報　昭和63年度』栃木県埋蔵文化財調査報告第105集
栃木県教育委員会	1993	『栃木県埋蔵文化財保護行政年報17』栃木県埋蔵文化財調査報告第153集
栃木県史編纂委員会	1981	『栃木県史　通史編1　原始・古代一』　栃木県
中村浩	2001	『和泉陶邑窯出土須恵器の形式編年』　芙蓉書房出版
初山孝行	1991	『鹿沼流通業務団地内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第121集　栃木県教育委員会
谷中隆・大島美智子	2001	『櫛現山遺跡・百目木遺跡　(本文編Ⅰ)』　栃木県埋蔵文化財調査報告第257集
桑木誠・田熊清彦	1989	「古代下野の土器様相(1)」『栃木県考古学会誌』第11集　栃木県考古学会
桑木誠	1998	「栃木県における古墳時代中期の土器様相」『ムラ・まつり・古墳－5世紀の北関東－』栃木県教育委員会

遺跡遠景（南東より）



遺跡全景

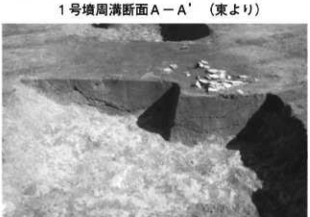
図版２

遺跡全景（南東より）

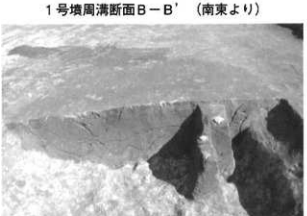
遺跡全景（西より）

１号墳周溝断面Ａ－Ａ'（東より）

１号墳周溝断面Ｂ－Ｂ'（南東より）

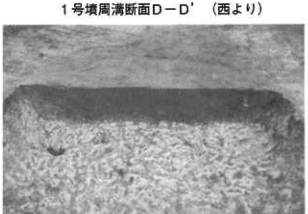


１号墳周溝断面Ｃ－Ｃ'（南西より）



１号墳周溝断面Ｄ－Ｄ'（西より）

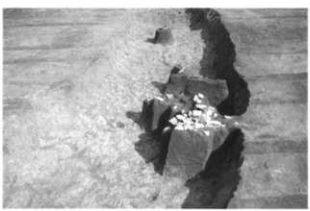
１号墳周溝断面Ｅ－Ｅ'（西より）



１号墳周溝断面Ｆ－Ｆ'（北東より）

1 号墳遺物出土状況（南東より）

1 号墳南東遺物集中区（北東より）



1 号墳南東遺物集中区（南東より）

1 号墳南東遺物集中区（北より）

1 号墳南東遺物集中区（北より）

1 号墳南西遺物集中区（北西より）

1 号墳南西遺物集中区（北西より）

1 号墳南西遺物集中区（南東より）

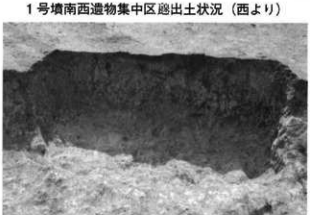
図版４

１号墳南西遺物集中区（南西より）

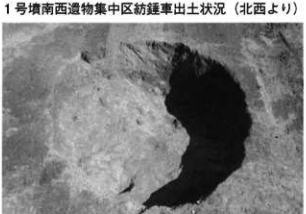
１号墳南西遺物集中区（西より）

１号墳南西遺物集中区甕出土状況（西より）

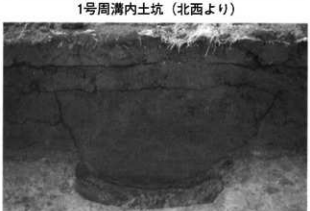
１号墳南西遺物集中区紡錘車出土状況（北西より）



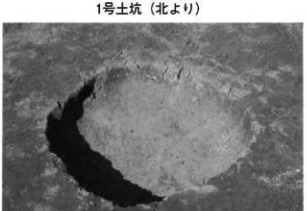
1号周溝内土坑（北西より）



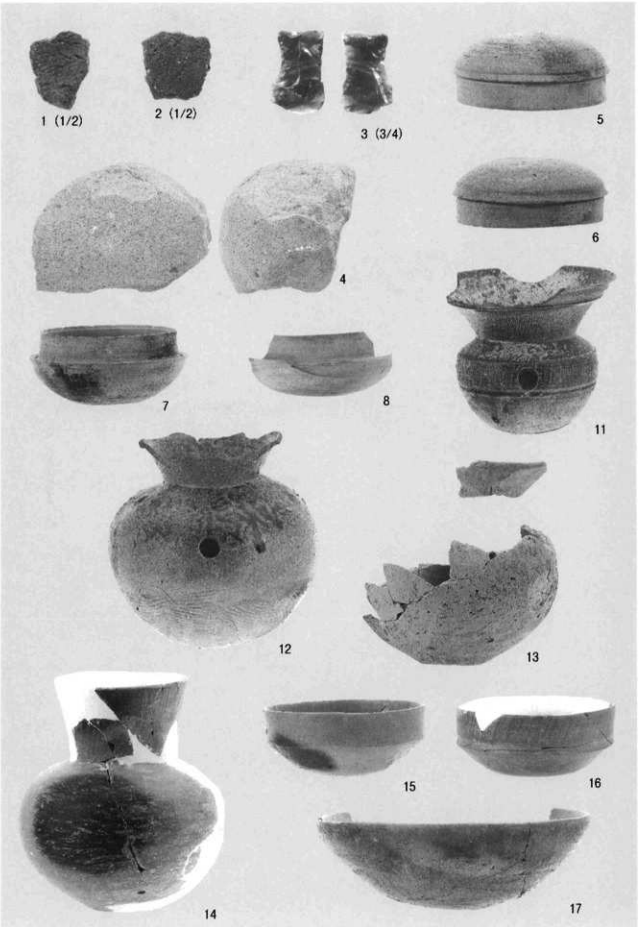
1号土坑（北より）



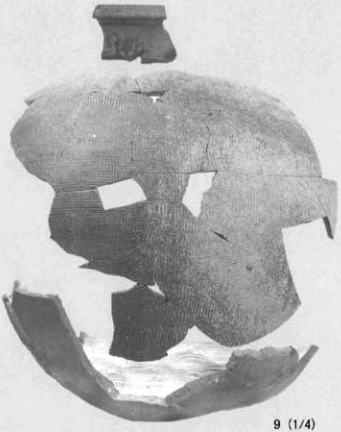
2号土坑（北より）



3号土坑（北より）


1 (1/2)
2 (1/2)
3 (3/4)
5
4
6
7
8
11
12
13
14
15
16
17

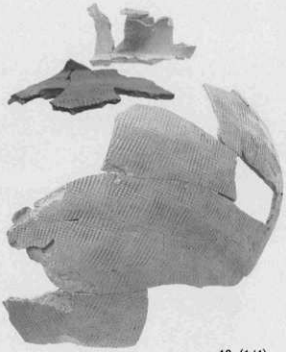
図版６



9 (1/4)

18

19



10 (1/4)

20

21

22

23

24

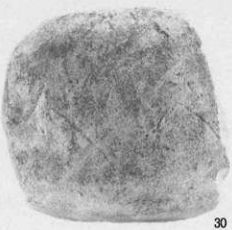
25

26

27

28

29 (1/2)


30 (1/4)

報告書抄録

ふりがな	つじのうちいせき
書名	辻ノ内遺跡
副書名	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書 第61集
編集者名	佐々木藤雄・小野麻人・小久貫浩
著者名	佐々木藤雄・小野麻人・林 邦雄・市橋俊一・大橋 生
編集機関	(株)東京航業研究所　所在地　〒350-0835　埼玉県川越市大字伊佐沼28-1
発行機関	宇都宮市教育委員会
所在地	栃木県宇都宮市旭1-1-5　TEL (028-632-2766
発行年月日	平成19年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
つじのうちいせき 辻ノ内遺跡	とちぎけんうつのみやしにしかたまちあざつじのうち 栃木県宇都宮市西田町字辻ノ内209-1他	09201	3211	36° 30′ 51″	139° 50′ 27″	2007.2.26 ～ 2006.3.17	626 ㎡	宗教施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
つじのうちいせき 辻ノ内遺跡	古墳	縄文		縄文土器、石器	後世の耕作により遺構及び主体部は削平されていたが、周溝内より、ほぼ完形に近い状態で須恵器の甕・瓶・坏や土師器の坏・高坏が出土した。古墳祭式を考える上で貴重な資料が得られた。
		古墳	円墳1	須恵器、土師器、石製品	
		近世以降	土坑1	五輪塔、陶器	

栃木県宇都宮市

辻ノ内遺跡

印刷　平成19年6月30日
発行　平成19年6月30日

編集・発行　宇都宮市教育委員会文化課
宇都宮市旭　1-1-5
TEL　(028)632-2764

印刷　株式会社ウエタケ
〒101-0065　千代田区西神田1-3-6
TEL　(03)3261-3917